

「耐え忍びなさい」

ヤコブ5：7～8

堀田修一 21・7・4

I 主が来られる時まで耐え忍ぶ。：7、8。

1. 「ですから」→主が正しくさばき、報いられるのですから。主は私たちが苦しみ、不当な扱いを受けている事すべてを見て知っていて下さることを忘れてはいけません。すべての出来事には、神の御目的、意味がある。神の「訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです」(ヘブ12：7)。神は試練を通し、私たちを成長させ、主の姿に変え続けておられる。神の前に泣いても良い。
2. 「兄弟たち。主が来られる時まで耐え忍びなさい」。「来られる」の原語は、「王侯が領地内の町に公式に来訪すること」を意味する。その時には、この王(イエス様)の来訪(再臨)を無視できる人は誰もいない。主の再臨を示すのにこの語が用いられているのは、主の最初の来臨(クリスマス)と対比させるため。主はベツレヘムで生まれ、ナザレの大工として育ち、枕する所もない人の子として生活され、人々に捨てられ十字架で死なれたイエス様は、人間的な世の欲の目には隠され、ただ信仰のある人にもみ、神と認められた。しかし、この世の終わりの日に再び天の雲に乗ってこられる時、主はすべての人の目に天からの王として、すべての人の審判者として来られる。そして、主の祝福を与えるために主を信じている人々を集められる。私たちは、この素晴らしい日を信仰の目で見つつ待ち望んでいる。
3. 「耐え忍びなさい」。とは、希望のない無気力で消極的な辛抱ではない。やがて来る確実な希望をもって忍耐し、神が置かれた所で、神からの使命をコツコツと果たす事。この語は、神の私達人間への忍耐に用いられている(ローマ2：4、Iペテ3：20)。神が、私たちに対して計り知れず忍耐深くあられるのだから、その神の深い愛と忍耐を思い、今の苦しみを耐え忍びたい。苦しみや不当な扱いを与えている者たちに、神がすぐに報復されないからといって、
①神につぶやいてはならない。神の時と私たちの願う時は違う。神には神がお考えに

なった神の時（最善の計画）がある。「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある」（伝道者の書3：1）。※証し。私の人生にも。

②あせって、「自分で人に復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい（原語：神に場所を与えなさい）…わたしが報いをする、と主は言われる」（ローマ12：19）。

※証し：赦しと祝福と報い。私たちの心に住んでおられる神である御霊は、私たちに忍耐（ガラ5：22、御霊の実の「寛容」は忍耐と同じ原語）を与えて下さる。私たちに忍耐がないことを認め、御霊に満たされるように祈ろう。そのためには神の前に静まるディボーションや祈りの時を確保することが大切。神は私達の涙を受け止めて下さる。

4. 「見なさい。農夫は大地の貴重な実りを、秋の雨や後の雨（パレスチナの晩秋と初春の雨。この地方は雨が少なく水が貴重）が降るまで耐え忍んで待っています」：7。農夫は、耕し種を蒔いても、雨が降るまで耐え忍んで実りを待つ。※証し。作物の実り、花が咲くには忍耐が必要。私達もすぐに実りがなくても、失望せず、コツコツとなすべきことをしつつ耐え忍びたい。

①この地上でも、神の時に実りを下さる。

②主の再臨の時に正しい報いを下さる。神は私達の涙をぬぐい取って下さる（黙示録21：4）。

Ⅱ 「あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られる時が近づいているからです」：8。

1. 「耐え忍びなさい」原語：気長である。辛抱強い。辛抱する。寛容、寛大である。長く苦しむ事があっても、主に頼り耐える。やけになって、主への信仰、信頼、人生、主から使命を投げ出さない。

2. 「心を強くしなさい」。私たちは、色々な苦しみで心が弱る。心に栄養を与え養い、心を強くするのは

①いつも御言葉を心に蓄え、聞こう。「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから」（イザ41：10）。「金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい（感謝しなさい）。主ご自身がこう言われるのです。『わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない』

(ヘブ13:4, 5)。

②「愛と善行を促すように、互いに注意を払おうではありませんか。…自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日(主の再臨の日)が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか」(10:24, 25)。お互いつらい時、涙をそっと受け止めよう。寄り添う事は、励ましてある。

3. 「かの日(主の再臨)が近づいている」: 25。※大切な事を確認したいと思います。終末、世の終わりの聖書的理解=終末、世の終わりと聞くと、ずっと先の日の事と考えてしまう。しかし、聖書をよく読むと、新約時代の信者たちは、すでに「終わりの時」が始まっており、その中に生きている事を自覚していた。新約聖書の記者(真の著者は、聖霊なる神)達は、AD100年以内に聖書を記したが、多くの人々が主の再臨は、近づいていると記している。それは間違った理解から記したのではない。パウロ「今は救い(主の再臨)がもっと私たちに近づいている」(ローマ13:11。AD56年頃の著)。ペテロ「万物の終わりが近づきました」(Iペテロ4:7。AD63年頃の著)。ヨハネ「見よ、わたし(主イエス)はすぐに来る」(黙示録22:12。ヨハネはAD90年代に記した)。このヤコブの手紙(ヤコブもこの手紙をAD45-48年頃「かの日=主の再臨が近づいている」と記している)が記された時より、現在は約二千年近づいている。ここ数年の世界中の出来事、気象の変化を見る時、主が来られる時、世の終わりについて主が語られたマタイ24章の真実性がますます確信させられる。「人の子(主)は思いがけない時に来るのです」(マタイ24:44。マタイはAD60年代に記した)。
4. 本当に主の再臨はあるのか?主の再臨は遅いとつぶやく人への御言葉の答え→「主は、ある人たちが遅れているとと思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまいます」IIペテロ3:9~10(ペテロがこの書を記したのは、AD約66年頃)。「目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです…用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから」マタ24:42, 44。また、私たちのほうが、主の身元に行く日(地上で死を迎え主のもとに行く日)も一日一日近づいてい

る。主にお会いできる日！その日はいつかはわからないが。「生まれるのに時があり、死ぬのに時がある」伝道者3：2。「私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。そのほうが、はるかに望ましいのです。しかし、この肉体にとどまることが、あなたがたのためには、もっと必要です…あなたがたの信仰の前進と喜びのために」ピリピ1：23～25。「万物の終わりが近づきました。ですから祈りのために、心を整え身を慎みなさい。何よりもまず、互いに熱心に愛し合いなさい。愛は多くの罪をおおうからです」I ペテロ4：7，8。主がこの世に来られる再臨と自分の死（天国に迎えられ主とお会いする）は、一日一日、近づいている。その日まで、試練、忍耐すべき事が多くある。しかし、主に頼り、耐え忍びたい。主が与えられた使命を全うできますように！主は、寄り添い支えて下さる。赦しときよめを下さる。

①まず神との関係を第一とし、祈り、神と深く交わり、主の日に心を整えたい。

②また、互いに愛し合い、赦し合い、支え合いつつ、主を迎えたい。

③人々の救いの為に祈りつつ主を証ししつつ、主の再臨の日に備えたい。

④一日一日、神が置かれた所で、「主のみこころであれば、私たちは生きて、このこと、あるいは、あのことをしよう」（ヤコブ4：15）と確認し、神の恵みを数えて感謝しつつ、耐え忍びつつ主を待ちたい！主は私達の心の涙を理解して下さる。